

気鋭の新進画家たち



青木 宏之
Hiroyuki Aoki

1962年 東京生まれ
1989年 東京芸術大学日本画科卒業
1991年 同大学院修了 第17回東京春期創画展
第26回神奈川県展(特選)



inward (c) 雲肌麻紙・岩絵具・箔・墨
181.0×364.0cm

日本の画家は、戦後、日展や院展、創画会展など大きな団体展で入賞を重ね、そして世の中の桧舞台に飛躍するという道筋を歩んでいくことが、一流画家になる一般的なコースであった。

ところが、最近では、団体展に所属しないで、無所属で個展を開く画家が増えている。そうした無所属で個展を開く画家に焦点を当てて評価する、美術評論家も現れてきており、こうした動きが美術界の一つの大きな流れになってきている。つまり画家の評価の仕方が大分変わって来ているといえる。

世界の経済の中心で、多くの富が集まるアメリカ・ニューヨーク。こうした大陸のアートの世界は、日本のような団体展で画壇に登場し、評価が固まるといったシステムではなく、画廊や美術関係者が画家を評価することによって、画家が世間にデビューするという構造が中核になっている。

かつて、フランスの英雄で、フランス革命後の混乱を統制し、ヨーロッパを支配するほどの巨大な帝国を築いたナポレオン・ボナパルトが、貴族たちの芸術の殿堂だったルーブル宮殿の扉を一般庶民に開放し、さらにサロン(官展)の組織改正にも取り組むなど、19世紀初頭のフランスの文化・芸術に大きな影響を及ぼしたといわれている。

フランスでは、17世紀に始まった官製のサロンが民営化されて以降、今日では、画廊で作品が発表できる前の段階のアーティストの発表の場になっている傾向が強い。ある程度の評価される画家は、画廊での発表が主流だ。

そうした海外の美術界の波が日本にも押し寄せてきている中、画家たちも意欲的に個人で発表しようとする流れがある。そこで、今回は、団体展に所属しないで、無所属で活動している気鋭の若手画家たちを取上げてみた。



薄墨桜2007 F10号



山茶花 F6号



赤澤 嘉則

Yoshinori Akazawa

1971年 京都市生まれ
 1995年 京都市立芸術大学美術学部美術科日本画卒業
 1997年 京都府立陶工高等技術専門校成形科修了
 1998年 京都市工業試験場陶芸コース修了
 2005年 カバーデザインPlato's cosmology and its
 ethical Cambridge University Press (U. S. A.)



池上 白鶯

Hakuou Ikegami

1980年 大阪府枚方市生まれ
 2003年 嵯峨芸術大学短期大学部専攻科古画研究工房卒業
 2005年 第65回日本画院展「聖観音来迎図」入選



南瓜ノ図 薄美濃紙 水干絵具



静謐 F10号